

<b>Title</b>	戦後日米関係の回顧と将来の展望（国際シンポジウム：巻頭言）
<b>Author(s)</b>	聖学院大学総合研究所
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.26 別冊, 2003.3 : 5-5
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4011">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4011</a>
<b>Rights</b>	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 国際シンポジウム 戦後日米関係の回顧と将来の展望

第二次大戦後の占領期が終わり、サンフランシスコ講和により日本が主権を回復してから、今年でちょうど半世紀が経過した。日本は戦後六年以上、連合国の、実質的にはアメリカの占領下におかれ、その間アメリカはまず日本を民主主義と平和主義の国に改造しようとし、やがて冷戦における同盟国として再建することに力を入れた。このようなアメリカの占領政策は講和後の日本の国としての性格に大きな影響を及ぼし、日米関係の性格を規定してきたといえる。過去半世紀の日米関係を論じるにはその基礎を作った占領期の意味を考え、さらに日米が戦った第二次世界大戦を視野に入れなければならない。昨年九月一日にテロの後でアメリカ人がもつともそれに近い経験として連想したのはパールハーバー攻撃であったように、この戦争の記憶は日米両国民の心に強く残っており、それは近隣諸国についても言えることである。

このシンポジウムでは多年アメリカの大学にあつて学界活動を行い国際的に著名な国際関係史学者、入江昭氏と、日本の大学にあつて日米関係に関連する著作の多い気鋭の歴史学者、油井大三郎氏および李鍾元氏とを講師として招き、第二次世界大戦後の日米関係の意味を総括し、新しい世紀における両国の将来を展望する。